【完結】群青所望

劇鼠らてこ

【注意事項】
このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。
小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

群青色はすぐ近くにあった。
群青色はすぐ近くで踊っていた。
群青色はすぐ近くで死んでいった。
夢を見ているみたいだと言われた。
夢を見ているみたいだと思った。
夢を見てみたいなと言った。
そうして私は、あの子と再会した。

目次

群青所望（前）／1 …… 1
群青所望（前）／2 …… 10
群青所望（中）／1 …… 21
群青所望（中）／2 …… 32
群青所望（後）／1 …… 44
群青所望（後）／2 …… 53
群青所望（後）／3 …… 63
群青所望（後）／4 …… 71
群青所望（後）／5 …… 85
蛇足確認 …… 101

群青所望（前）／　1

群青所望

それは、いつの事からだっただろうか。
バイクが突っ込んできて、頭に大怪我を負った時か。爆破事件に巻き込まれて、脚に大怪我を負った時か。暴漢に襲われて、腕に大怪我を負った時か。
「どれも最近の事じゃないか。もっと前の事なんだろう？」
そうだ。もっと前。
この世に生まれ出でて、瞳を開けた時だ。
「それは消えないのかい？」
消えない。目蓋を閉じても、眠りに就いても、意識を落としても。
完全な暗闇というものは、私にとって、群青だった。
「うーん……ちょっと、分かるかもしれない人に相談してみるよ。いいかな」
曖昧に頷く。模糊に返事をする。
今尚、視界を埋め尽くす群青。彼らの周りを泳ぎ回る群青。

その一つを引き寄せれば、視界の端で男子生徒が肩を震わせた。

水野良空（イソラ）は高校時代からの友人だ。

僕らの高校は私立で、有名な進学校だった。

合格発表の時、段が同じだったためになんとなく覚えていた名前が、一緒のクラスで、前の席だった。以来、僕は良空の数少ない友人の一人となった。

うちの学校は私服オッケーっていう進学校だったので、みんなそれぞれの服装で自分を表現していたと思う。

そんな中で、もう一人似たような境遇の友人がいるけど、その友人とは対照的に、良空は目立たない子だった。

服装が毎日同じというわけでもない。色を揃えていると言う事も無い。騒ぐこともせず、話す事もせず、ただじっと虚空を見つめては、眠る。行動自体はもう一人の友人と似ているけど、そこに華々しさとか、凛々しさなんてものはない。儚げと言えば聞こえはいいけど、その実地味というレッテルを貼られて仕方のない特徴だった。

けれどそんな特徴よりも、僕が興味を惹かれたのは彼女の目だった。

目を開いているのに、起きているのに、夢を見ているかのような目。気怠く開かれたその瞳は、いつも濡れている様だった。

泣きそうなのか、眠そうなのかわからない。そんな在り方が、僕にとっての水野良空の全てだった。

そう。

もう一人の友人――式が、あんなことになるまでは。

「人殺しがあったみたいだね」

「――え？」

全身を黒で統一した名前通りの眼鏡は、今からお昼ご飯を一緒に食べよう、という時に、そんな言葉を放り投げてきた。余りの唐突さに私は言葉が出なかったけど、私の左隣に座る着物の女の子・式は、その物騒な単語に思わず聞き返してしまったようだ。

言葉は出ないけど、手は出る。ローストビーフサンドを手に取って、塞がらない口にそれを詰めて、顎を押し上げた。

「だから、人殺し。夏休みの最後の日にさ、西側の商店街でそういう事件があったんだ。まだ報道されてないけど」

「人殺し。それは殺人という意味で？」

「それ以外に人殺しの意味があるのかは知らないけど、そうだよ」

「それはまた、穏やかじゃないわね」

「うん。内容もかなりキワモノ。両手両足を刃物でばっさりやって、あとはほったらかしにしたんだって。現場は血の海でさ、現場をトタン板で隠したほどらしい。犯人は捕まってない」
「死因は酸欠？　ショック死？」
「この場合はショック死だろうね。正確にはショック死が先で、酸欠が後だ」
　ミチミチと自分にだけ聞こえる音を立てながら断たれるローストビーフ。断たれた後は磨り潰される。でも、血の海にはならない。ショック死はするかもだけど。
　この全身真黒眼鏡は時たまこういう話題を振る。身内に警察関係者がいるのだとか。捜査状況を肉親に漏洩するくらいなので、あまり高い身分ではないのだろうけど。
「あ、ごめん。式と良空には関係の無い話だったね」
「別に。関係の無い話ってわけじゃないわ」
「私には全く関係の無い話だけど、興味はある。でも食事時の話じゃなくない？」
　そうだね、と全身真黒眼鏡は頷いた。
　ローストビーフは変わらず美味しいままだった。流石四八八円もするだけはある。高い。
殺人考察（前）／

放課後の教室。夕焼けの赤に染まるそこ。
「帰らないのか？」
「帰る必要が無いから」
「ふーん」
みんながしっかり下校した事を確認してそこに向かうと、決まって式――否、織がいた。良空がいるのは、時々だった。
彼女たちは何をするでもなく、窓の外を見たり、虚空を見つめたりしていて。
赤と黒。赤と白。
コントラストになりきれない教室で、良空は自分の机に座り、織は窓に寄りかかっている。
「帰る必要が出来た」
良空は僕を見るなりそう言って、教室を出て行く。僕が来ることが、帰る理由なのだろうか？
彼女の先の読めない行動はいつもの事だけど、今日は特段と読めない。
ただ、この赤い世界で、その青い瞳だけが爛と輝いていた事だけが、印象に残った。
「暗い……けど、明るいね」

群青に誘われるまま夜道を歩く。夜道は群青が照らし、月光は群青が遮る。
夜は出歩くなと、そう言われた。連続通り魔事件は未解決で、犯人はまだ捕まっていないからと。
でも、誘われたのだから仕方がない。余程の事が無い限り、私は群青の行きたい方へ行ってあげる事にしている。
今の私の様子を、かつての友人は夢遊病患者のようだと称した。
目を閉じたまま、確かな足取りで進む私を、夢を見ているようだと表現したのだ。
「――」
それは半分正解だと、私は言ったと思う。
群青は夢の中にも現れる。目蓋の裏にも表れる。
でも、半分は間違いだと思ったはずだ。
今の状態が夢遊病だとするのなら、それは私の平時と同じ。目を開けていようと、閉じていようと、何も変わらずに群青は現れる。ただ、目を開けている体力が勿体無いから、目を閉じているだけなのだから。
「――」
音を聞き取るのも、口を動かすのも億劫。ただ、足だけが群青と同じ方向に動く。彷徨っているわけじゃない。私の行きたい場所は、最初からわかっている。

ほら、群青が止まった。
その場所に、目的がいる。だから、目を開けた。
「……やっぱり」
そこには、首の斬られた真赤な死体と――白い着物の、学友が佇んでいた。
殺人考察（前）・了

「幹也もソイだね。毎週通うの、億劫にならない？」
「……マメ、って言いたいのかな。うん、ならないよ」
「まぁ、考えるのも面倒だから、別にいいけど。それじゃ、いってらっしゃい」
全身真黒眼鏡は大学を中退した。この真面目ちゃんがそれを決断したと言う事だけでも凄いのに、なんでも親に相談せずに実行してしまったため、家出状態なのだとか。
それでいて就職はしているのだから手が付けられない。その就職先はどうにも怪しいのだが、賃金は出ているらしいのでノーコメントだ。
「たまには良空もどうかな」
「……驚いた。土曜日だからって、選択授業が無いと思ってるの？」
「あぁ……そうか。ごめん」
「まぁ、とってないけど」

キャラメルチョコチップソースキャラメルフラペチーノｗｉｔｈチョコレートソースを一気に飲み干して、口元を拭く。
「私が行っても、式は喜ばないよ」
私達の共通の友人・両儀式は、現在昏睡状態である。
群青所望（前）／
「うん、キミの持っているチャンネルは中々に珍しいネ。〝歪曲〟や〝発火〟みたいな物理的な物じゃない。存在不適合者である事は確かだけど、それが何か害を齎すというわけでもない。〝常識〟はしっかりあるし、なんなら良識的だ。
きみネ、ボクに相談してきてくれたのは嬉しいけど、どうしてほしいのかな。きみの言う〝群青〟を見えなくするには、キミの異常なチャンネルを破壊するしかない。でもそれってつまり、脳を潰すって事サ。簡単に言えば殺すってこと。それは嫌だろう？
うん、だから、ボクに出来る事は何もないってコト。〝掠取〟のように破滅的なチャンネルだったらこっちも考えたけど、聞いた限り〝群青〟は無害だ。ただ、物の寿命が見えるだけなんだからネ」
「そうですか」
「あっさりしてるネ。実はきみ自身も気にしていなかった、という所かナ。ちなみに聞くけど、ボクの〝群青〟はどんな感じなのかナ。どこにいるんだい？」

「ここにいますよ。押し込もうとしても掴もうとしても全く動かない辺り、博士、相当しぶといと思います」
「そりゃあ嬉しいコトを聞いたネ。とまぁ、そう言う事で。立て続けに二つの案件を出してくる辺り、蒼崎くんは元気そうだね。良かったよ」

群青所望（前）／　2

／　1

「式はまだ眠ってるんだ？」
「うん。ずっと」
「それで、幹也はまだ通ってるんだ」
「式が起きて、戻ってくるまでは通うよ」
「流石」
　いつもの喫茶店、と称していいのかはわからないけど、それなりに良く利用する喫茶店の、これまたよく利用する席で、僕と良空は話していた。
　高校入学から今まで、思えば良空との付き合いも長くなったもので。式と同じだけの時間だから、当たり前ではあるのだけど。
「……」
「良空？」
「……群青が……」
「群青？」

高校時代からの事だけど、良空は虚空を眺めている事が多々あった。ただぼーっとしているのではなく、虚空に在る何かを目で追っているような、そんな瞳。

今、良空の瞳は僕の周り……僕のお腹や肩の辺りを泳いでいる。

「……もうすぐ、式は起きるかも」

「え？」

「幹也の群青が、元気になってる。何かあった？」

群青。その言葉は確か、式が車に撥ねられた時……その翌日に話しかけてきた良空が言っていた言葉だったように思う。

確かそう――、式が群青に魅入られた、って。

「うーん、僕には特に何もないけど……ちょっと知り合いの凄い人がね、式を見てくれるって話になったんだ」

「へぇ。知り合いの凄い人」

知り合いの凄い人――僕の勤める事務所の主、蒼崎橙子さん。人形作り専門家と謳っておきながら、建設やらなにやら、とにかく物づくりに関しては右に出る物がいない（だろう）、凄い人。凄くない部分は沢山あるけど、やっぱりすごい人だと思う。

世捨て人で、色々と残念な部分もあるけどね。

「ふぅん」

良空はいつも通り、興味の無いだろう顔で相槌を打つ。
彼女がいつだって、興味があるという素振りを見せて相手の話を引き出すのに、心の中では特に惹かれていない――そんな性格であるのは、出会ってからの数年で把握できている。
式にすら、聞いたのならもう少し興味を持ちなさい、と言われた事があるほどに筋金入りなのだから。
「じゃあ、その人が式を引っ張ってくれたのかもね。幹也がずっと手を握っていた甲斐はあったんだよ」
「……」
「あぁ、今のは比喩だよ。もしかして本当に握っていた？　それは重畳」
カラカラと笑う友人に溜息が出る。いつもこうなのだ。本質を突くような発言をする割に、その言動は全てからかいから生じたもの。高校を卒業しても変わらない、あまり目立たない格好とは裏腹に、とても角の立つ性格をしている。
「良空、式が起きたら、一緒に会いに行かないかい？」
「私が行っても式は喜ばないよ。幹也が一人で行った方が絶対良いって」
良空は頑なに式に会おうとしない。
私が行っても式は喜ばない、の一点張りで、そんなことないと言っても耳を貸さな

かった。式が昏睡する前に喧嘩でもしたのかな、と思ったけど、そういうわけでもないらしい。

「私はね、幹也。式に会わす顔がないんだよ。だって私は、見て見ぬふりをしたからね」

「それは……どういう事かな」

「確実ではなくとも――私は、式が眠ってしまう事を、知っていたんだからさ」

それは、嘲笑のような懺悔だった。

伽藍の洞　／

群青が騒いでいる。

郊外の病院の方。確か、式が入院している病院だ。

そこに行きたいと。私を取り囲んでいた全ての群青が、あそこへ行きたいと。

「わかった。行こうか」

余程の事が無い限り、私は群青の行きたい場所へ向かう。

私の群青は私からはあまり離れられないから。

「……明るいね」

郊外の病院の方。空が明るい。もう午前零時になろうというのに。

群青色に明るい空は、明滅を繰り返しているように見える。

見える。と言っても、やはり目蓋は開けていない。

閉じていても見える群青が、ずっと私を呼んでいる。

当たり前のように、病院の門は閉じていた。周囲は鉄柵で覆われ、入る術は無い。

だけど、群青は中へ……奥へ行きたがっている。

余程の事が無い限り、私は群青を優先する。

これは余程の事だろうか。不法侵入、器物損壊。紛う方無き犯罪歴を、私の経歴に張り付ける事は、群青の行動を阻むに足るだろうか。

「……そこで何をしている」

「この病院に、入りたいの」

「何の目的で？」

「私に目的は無いよ、綺麗な赤い髪の人」

病院の鉄柵の内側に、その人は立っていた。瞳を開ける。ほら、やっぱり綺麗な赤い髪。

私の群青（セカイ）によく映える。

「……驚いた。類は友を呼ぶと言う言葉があるが、こんなにも早く呼ぶものかね。どれ、開けてやろう。美しい群青の瞳の子」

女の人は関係者用出口らしい、鉄柵の小さな扉を開けてくれた。

会釈をしてそこに入れば、外と中の空気はまるで違った。まるで、そう、まるで……別の世界に来たみたいな、そんな雰囲気。
群青が沢山集まってくる。歓迎されている。
目を瞑れば、もっとたくさんの群青がいる事を感じ取れた。
「あっち？　うん、わかった」
誘われるままに足を動かす。
そこに私の目的は無い。そこに私の意思はない。
ただ、群青の行きたい場所に、行かせてあげる。
その場所が例え凄惨な殺人事件の現場でも、学友が凶行に走る瞬間でも、恐ろしい幽霊の溜まり場でも。
余程の事が無い限り、私は群青を止めたりしない。
止めようと思えば、簡単に止められるから。

少し行ったところ。
中庭。そこに、彼女はいた。
死人のように白い肌。
眼を覆う包帯。

「驚いた。猫か、おまえは」
　赤い髪の人が呟いた。三階の病室の窓が開いている。彼女は、着地の衝撃を殺すような格好をしている。
　……飛び降りたのか。
「おまえか。なんでこんなところにいる」
「監視していたからな。そら、休んでいる暇はないぞ。流石は病院、活きの良い死体がある。幽体のままでは近づけないから、肉としてお前を殺して乗り移る気だよ」
「それもこれも、おまえのおかしな石のせいだろ」
　彼女と赤い髪の人は知り合いだったのか、理解の及ばない話をしている。
　美しい群青を走らせて、彼女はこちらを振り向くことなく。
　あぁ、これほどの強さがあるのなら、彼女はもう群青に魅入られる事は無いだろう。
　あれはてこを使っても動かせない。動かせるものがあるとしたら、それはあの全身真黒眼鏡くらいだろうから。
「おまえのせいなら、おまえがなんとかしろ」
「承知」
　ぱちん、と指を鳴らす音がした。
　瞬間、熱を感じる。何事かと瞳を開ければ、そこには燃え上がる何かがあった。

何か。ナニカ――いや、人だ。人というか……死体というか。

群青が寄りつかないもの。死ぬ前のものにはこれでもかと集まって来るのに、死んでいるものには見向きすらしない。

そういうものは、目を瞑っていては見えない。

「おい、詐欺師」

「そう言うな。人間大のものは破壊が難しいんだ――君はどうにかできるか？」

「群青は死体に興味が無いから、無理」

ここへきて初めて言葉を吐いた。

彼女の肩が震えたような気がしたけど、決して振り返らない。

「なんだ、仲間がいたのか。でも、あんた達には無理なんだ」

「……君にも無理だ。死者は既に死んでいるから殺せない。ここは逃げよう。朝になれば、悪い夢も覚める」

赤い髪の人が下がる。眼前の死体は、折れた足で……しかし止まる気配すらなく、動いている。ゾンビ、リビングデッド――いや、憑かれているだけか。

死体憑きなんてものもあるのか。一つ知識が増えた。

「……」

赤い髪の人は下がったのに、彼女は動かない。

彼女はただ、嗤っていた。
「死んでいようが、なんだろうが――あれは〝生きてる〟死体だろ。なら――」

着地時の姿勢から、前屈姿勢に。
まるで肉食獣が獲物に飛びかかるかのような、その姿。
彼女の周囲を、歓喜の声をあげるように群青が飛び交っている。
「なんであろうと、殺して見せる」
はらりと、瞳を覆っていた包帯がほどける。
闇の中、青白い光が開く――。
「っ、――」
ひどい頭痛を覚えた。
あれは、私と同じチャンネルだ。
視聴デバイスが違うだけの――。
「両儀の肉体でもない君が、アレを直視するのはいけない。――式！」
私と青白い光の間に入った赤い髪の人が、何かを彼女に投げる。
あの光は、私の普段見ている群青とは違う。もっと直接的なものだ。
私の見る群青が〝寿命〟なら――彼女の魅せる青白は、〝死〟。

「群青、と言っていたか。君の見ているそれは、所謂ところの運命力。人間が当たり前に生きる為に使っている幸運、というヤツさ。それを視覚化できるチャンネルに君は接続している。

死を回避するための力を視る事が出来る君は、死そのものを視るのは耐えられないんだろう。君が普段見ているものは〝死に至るまでの過程〟であって、〝死という結果〟ではないからね」

ザク、ザク、と肉を立つ音が響いている。高校時代に良く食べていたローストビーフサンドを噛み千切る時のような音だ。

群青は彼女に寄り添いこそすれ、その身体に入る事はしない。赤い髪の人の言葉を借りて言うのなら、運命が味方をしているのだ。幸運を侍らせて、運命が彼女の背を押している。

しばしその様子を見ていた。

でも、心配はいらないだろう。ついこの間まですぐ近くに会った群青（じゅみょう）は、既に遠い場所に在る。代わりに群青（ぐんせい）がすぐ近くで舞っている。

あれで死ぬことがあれば、嘘だ。

「馬鹿者！　殺すなら本体を殺せ！」

突然、赤い髪の人が叫んだ。そして走り寄って行く。

またあの青白を見てしまう可能性を恐れ、顔を背けた。
数十秒。
「私は弱い私を殺す。
――おまえなんかに、両儀式は渡さない」
その言葉が、崩れ落ちるように放たれるまで。

群青所望（中）／　1

「それで、式は起きたんだ」
「うん。リハビリ……あぁ、社会復帰じゃなくて、更生回帰の方のリハビリ中だけど、目覚めたよ。凄いね、良空の言う通りだった」
「もっと褒めてもいいかも。ほらほら」
「うん……本当に、すごいよ」
「本当に褒められると照れるね」
　顔色一つ変えないこの友人は、照れているかどうかわからない。
　多分照れていないのだろう。わからないけど、わかることだ。
「良空の言っていた群青って、なんなのかな」
「群青は群青だよ。その辺りにいる、群青色」
「ユウレイみたいなもの？」
「透けてないから、違うと思う。群青はね、〝生きてる〟モノが好きなんだ。群青が元気な間、〝生きてる〟モノは死なないけど、群青に魅入られてしまうとすぐに死んじゃう。

群青はね、寿命なんだよ。昔からそう」
当たり前のコトを話すように高校以来の友人は言う。
橙子さんの事務所に勤めるようになってからそのテの話は割と聞くようになった僕だけど、こんな近くに、しかも友人がそのテの話をしてくるとは思っていなかった。
その驚きからだろうか。今までは踏み込まないようにしていた僕が、そこまで聞いてしまったのは。
「それが見えるようになったのは、いつの事からなのかな」

水野良空。女。大学生。
名前の読みこそ特殊だが、文字自体は平凡。
姿形、平凡。性格、少々難あれど、平凡。
「珍しい。物捜し、調べる事においてはお前の右に出る奴はいないだろうに、これだけしか調べてこなかったのか。しかもほとんど主観。らしくないよ、黒桐」
「高校時代からのクラスメイトなんです。調べるまでもないというか、なんというか」
「ふうん。で、この少女には〝群青〟が視えていると。少女はそれを〝寿命〟であると言っていたと」
「はい。生まれた時から見えているそうです」

「なら、それは淨眼だろうね。藤乃や式、あとこないだの未来視をすると言っていた子。あれらは魔眼……人体改造的な意味合いで後天的に付加された特殊な眼を意味するけど、淨眼は宿命的な遺伝……両親の精神性だとか、修練の果てに得た答えなんかで宿るものだ」

まぁ、式のはちょっと違うんだが、と橙子さんは付け加える。

最近立て続けに関わるようになった、そのテの話。

やはり良空もそのテの存在だったらしい。

「……ま、こういうのは専門家に聞いた方がいいだろう。黒桐、例の教授にまた名刺を持っていくといいよ」

「あぁ……わかりました」

浅上藤乃の事を聞きに行った例の〝ちょっとクセのある博士〟。長話が過ぎるきらいはあるけれど、橙子さんにこれほど頼られると言う事は、やはりその界隈における信用度が最も高いと言う事だろう。

そういえば良空とあの教授は同じ大学だったかな？

群青所望（中）／１

「……式？　ぼーっとして……どうしたの？」

「……別に。オレがどこ見てたって勝手だろ」

八月の終わり。ふと、トウコの机にあった資料の名前を見て、要らない事を思い出していた。いつかの放課後。織と話していた少女の事。
自分と、目の前で間抜け面を晒している友人の共通の知り合い……いや、一応友人と言えるのかもしれない少女の、その瞳を。
死を視るようになったからわかる。アレは、同類だ。
あんなにも近くに同類がいて……式は全く気付かなかった。その時はまだ織に全てを預けていたから、ということも原因としてあるかもしれないけど、織の殺人衝動さえ少女には働かなかった。
殺人鬼ではないから？　それとも――。
「あ、そろそろ時間だ。ちょっと出て来るね」
「……どこいくんだ、おまえ」
「良空の所。覚えてる？　水野良空。高校の時よく一緒にいた子だけど」
……つくづくこの能天気さは頭に来る。
けど、嫌いってワケじゃない。
「覚えてる。何しに行くんだ」
「近況報告かな。高校を卒業してから、一週間に一度……必ずって事は無いけど、会うようにしてたんだ。式も来る？」

「……オレはいいよ。会っても何を話していいかわかんないし」
「……そっか。じゃ、行ってくるよ」
この暑い中、よく出かける気になる。
式はまた、目を瞑った。

「面白い群青を連れているね、幹也」
「え？」
いつもの喫茶店の、いつもの席。
対面に座って一番に出た言葉がそれだった。
良空は興味深そうに僕の周りを見ている。
「幹也の群青を四つの群青が囲んでる。ダメだよ、幹也。群青に魅入られたら死んじゃうよ？」
「えっと……その〝魅入られる〟ってどういうコトなのかな。式の時も言っていたけど」
物騒な事を言った友人は柔らかく笑う。まるでそこに小動物でもいるかのように、虚空を撫でながら。
その様子を見て、昼間なのに、深海に放り込まれたかのような錯覚を覚えた。

「群青と目が合うってこと。幹也たちは見えてないからわかんないと思うけど、群青はよく顔の前に来てじっと見つめてるよ。そうして魅入られた人は、すぐに死んじゃうんだ。元気な群青は走り回ってるから、見つめてくる事なんて早々ないけどね」

カラカラと笑い、一度では覚えられない名前のコーヒーをズズズと飲む良空。

そういえば、良空のそれは淨眼というもので、両親の宿命や修練の果てに得るものだと橙子さんは言っていた。

「良空の両親って、どんな人だった？」

「あれ？　幹也に両親が死んでいる事話したっけ？　ま、どうでもいいけど」

多分、話していない。

調べて初めて知ったから。

「父さんは飛行士で、ママはなんだっけな……整備工……なんかの整備工だったと思う」

「その二人は、群青を見る事が出来たのかい？」

「さぁ？　死んじゃったのは私が三歳くらいの時だから、そんな事聞こうとも思わなかったよ」

「……それからどうやって生きて来たんだい？」

「父さんのお金で、なんとかね。ママはすぐに後を追っちゃったから、やるしかなかった」

……確かにこれでは、橙子さんに〝調べな過ぎ〟と言われても文句は言えなかったかな。

特殊な環境だ。それに、この言いぐさでは良空は、三歳の時点でお金の管理や日々の生活が自分だけで出来ていた事になる。

「そう言っているのさ、幹也。私はこの世に生まれ出でた時から群青を見ているんだよ？　それくらいできないわけがないじゃないか」

「……どういうこと？　よくわからないんだけど……」

「何をすれば群青が元気になるのか。何をしなければ群青がこっちに来ないのか。それがわかれば、生き方も効率的になるのさ。なんたって群青は寿命だからね。命を早める行動をすれば、それが例えば危険行為であれ、お金のやりくりであれ、群青は元気を失うよ。

私の群青は私の寿命。分からない事は全部群青が教えてくれたのさ」

我が子を自慢するように、良空は言った。

それは――とても恐ろしい事だと思った。

だって、それは。

「『良空は群青が元気になるのなら、どんなことでもやるのか？』って、聞きたいんだろう、幹也」

「……」
「安心しなよ、答えはＮＯだ。常識的じゃない行動はしないよ。余程の事が無い限りは群青の好きなようにさせるつもりではあるけどね」
　良空の手元でズゴッという音が立つ。
　二人同時に音の発生源――キャラメルなんとかコーヒーを見て、その長いコップの中身が空になった事に気付いて、同時に顔を合わせた。
　肩をすくめる良空。
　お開きだ。
「そうだ、幹也。式は元気になったのかな」
「あ、うん。もう元気だよ」
「そっか。それじゃこれ、あの綺麗な赤い髪の人に渡しておいて」
　良空はバッグから封筒を取り出す。
　結構、重い。
「……これは、なにかな」
「紹介料と、慰謝料かな。この間助けてもらったし、その前にも助けてもらった。私はロハが嫌いでね、行為には対価がないと私が納得できないんだよ」
「……わかった。橙子さんが受け取るかどうかはわからないけど、預かっておくよ」

「受け取らなかったら、幹也が貰っていいよ。紹介料っていうか仲介料は幹也が貰って然るべきだから」
重さ、厚さ的に二十万円くらいは入っているだろうソレを、なんでもないかのように。僕を信用してくれていると思えば嬉しいけど、流石に不用心が過ぎるんじゃないかな。
「ふふん、私には群青がついているからね。生活に窮するような散財をすればすぐに群青が反応する。で、今尚私の群青は元気。だから、問題ない」
「あんまり――」
『あんまり、そういうモノに頼り過ぎるのはよくないよ』、でしょ？　わかってるよ。これは私の気持ちだもの。群青に全てを委ねる程、面倒くさがりじゃないよ」
いや、良空は十二分に面倒くさがりだよ、という言葉は飲み込んだ。
多分、知ってるよ、と返されるだけだろうから。
「それじゃ、式と綺麗な赤い髪の人にヨロシク。私はこれから四限を受けなきゃだから」
「うん、わかった。また来週」
「また来週」
席を立つ。
良空の財布は、マジックテープ式だった。

境界式

今すれ違った女子高生。

一人、群青に魅入られていたな。

だからもう少しで死ぬだろう。それは一般で言う〝寿命〟――老いが来て、死ぬという意味ではない。

運命力を失い、運命に見放されて死ぬ。それを寿命が来るというのだ。

群青に魅入られたモノはなんであれ死ぬ。私みたい見えるヒトが動かしてやればその限りではないけど、すぐに群青を元気にしなければ、また魅入られて死んでしまう。

だから、式はすごいんだ。群青を普通の人の三倍も持っておきながら、しかも魅入られておきながら、式は死ななかった。この間みた式は群青の数も減らしていたし、元気な群青を従えていた。

そんな人、式以外に私は見た事が無い。

「……えい」

細身のサラリーマンが群青に魅入られそうだったから、ちょっと動かしてあげた。

自殺か、他殺か、事故か病気か。

なんにせよ、自殺でない限り……あのサラリーマンは延命する。

自殺なら無理だ。ただちょっと死にきれなくて、苦しい期間が続くくらいで……死の

うと思っている人には、群青は集まるから。

「……簡単」

簡単に人を救えるし――簡単に人を殺せる。

後者はやったことないけど。やろうと思えば、今この大通りにいる人全員、群青に魅入らせる事だって出来る。

でも、それをやれば確実に私の群青は動きを止めるだろう。

命を奪えば、命を奪われる。簡単なルールだ。

「……お前が、水野良空か」

「――人間じゃない。逃げる」

だから、群青を纏っていないのに話しかけてくる相手など――関わってはいけないのだ。

境界式　／　了

群青所望（中）／　2

「良くここが見つけられたわね、とだけ言っておきます。黒桐君は大丈夫だから、そう殺気立つのはよしなさいな」

近況報告のために時間がある時は毎週、無いときは隔週くらいの頻度で会っていた全身真黒眼鏡が、何の連絡も寄越さずに音信不通になった。二週間目まではそういうこともあるのだろうと気にしていなかったが、三週目ともなれば流石に心配になる。

高校の頃の数少ない知り合いに頼ってあの真黒眼鏡の住所を聞き出し、彼の住むところへ行ってみた物の、もぬけの殻。近所の人に聞けば、そういえば最近見ていないわねぇ、とのこと。

メールが通じず、家にもいない。

確かにあのブラック眼鏡は群青に取り囲まれていたけど、魅入られてはいなかった。だから死ぬことは無いはずだ。

だけど、どこかに監禁されて生かされている、とかなら群青は反応しない。そのまま八十、九十まで飼われるとしても、それは寿命。群青は寿命があると判断する。自殺を

する気が無い限り。
あの普通男に、自殺なんて特別が出来るワケないのだけど。
だから、尋ねた。訪ねた。
綺麗な赤い髪の人。全身真黒眼鏡の勤めているという事務所のオーナーらしい、あの夜の人。
「……幹也が眠っているのは理解した。群青が固まっている。いや、押しとどめられている？　……留めているのは、式の群青」
「へぇ、驚いた。そんなことまでわかるのか、君のその眼は」
当たり前だ。人によって群青は違う。誰の群青かなど、わからないはずがない。会った事が無い人はわからないけど。
さっきと口調が違う。メガネを取った事に何か意味があるのか。群青が変わったわけでもないのに。
「式もここにいるの？」
「そうか、式の知り合いだったのか、君は」
「高校時代の友達。私の事を調べたなら、知ってるでしょ」
目を細める赤い髪の人。
別に特別な事はしていない。そこの机に、無造作に私の顔写真とプロフィールが載っ

ている資料が散らばっているから。
　この人、片付けとかできないタイプなんだろうな。
「あぁ、全く……全て黒桐が悪い」
「責任転嫁の権化。それで、幹也は起きるんだよね？」
「問題なく、な。それは君が一番わかっているんじゃないか？」
「うん。幹也の群青は元気。……けど」
　部屋に溢れた群青を視る。人だけではない、モノにも群青はある。
　それは経年劣化や風化という形で存在を削る。
　だけど、動物ほど元気じゃない。サバンナの野生動物ともなれば話は別だろうけど、人ほど突発的な死を回避できない動物は、群青もゆっくりだ。死が、すぐそばにあるということ。
「まだ、何か？」
「……幹也と……式を助けてくれた、お礼。
　お姉さん、群青に魅入られているよ。近い内に……死が待ってる」
「……ほう？」
「私が、助けてあげようか？」
　式も面白い群青をしているけど、この人も結構面白い群青をしている。

無機物に似ているのだ。群青の形というか、性質が。
まるで、人形みたいに。
「いや、遠慮しておこう。私を殺す程のコトがあるのなら、それは回避し得ぬ運命という奴だ。君のその群青は未来視に通ずるところがあるようだし……私はそれに抗うつもりはない」
「そう。凄いね。珍しいというより、凄い。死の運命を知っていて、それを恐れずに、楽しむなんて。綺麗な赤い髪の人。名前を聞いても良い？　私は水野良空っていうんだけど」
「知っているさ。そして、君も私の名前を知っているはずだ」
「うん。蒼崎橙子さん。偏屈教授と幹也に聞いた」
綺麗な赤い髪の人――橙子さんは、クツクツと笑う。
面白かったようだ。
「……それじゃあ、私は帰るね。幹也をよろしく」
「ああ、預かっておくよ」
……別に、私のモノじゃないけどね。式のモノだよ、どっちかというと。

矛盾螺旋　／

九月を過ぎて、十月を過ぎた。

あの眼鏡は何事も無かったかのように次の週の土曜日に現れて、その話に触れもしない。

知らされていないだろうことは理解できるけど、心配した私が少しばからしい。あの廃墟に入る時、群青は凄く嫌がった。あそこの一階、絶対なんかいる。あんな怖い場所に入って、私は魔王城の最終セーブポイント前のような面持ちだったのに、この全身真黒眼鏡は能天気に、なんだか久しぶりな気がするけど、そうでもないか、なんて言って……。

「そ・れ・で、貴女は兄さんのなんなんですか？　さっきから何度も何度もはぐらかして……」

「だから、高校時代の友達。大学に入ってからも付き合いがある。毎週喫茶店で近況報告をしあう仲。何か問題が？」

「大アリです！　式だけでも……天敵なのに、藤乃まで出てきて……瀬尾さんもなにか含みがあったし……そこへ、また一人！　増えるなんて！」

「何の話か知らないけど、もう少し落ち着いたら？　あと、私は幹也をそういう風には見ていないよ。式のモノを横取りする程私は命知らずじゃないし」

「わかってるじゃないですか！　って、まだ式のものと決まったわけじゃありませんから！　っていうか名前呼び捨てって……！」

今、私の眼前でキャイキャイと吠え立てている黒髪女子は、誰なのだろうか。
文脈的にあの全身真黒眼鏡を兄さんと呼んでいるので、あの眼鏡の妹か。
随分とまぁ、元気な群青を持っている。この子は中々死なないぞ。往生際の悪いタイプだ。どんなに不利でも諦めない、不屈タイプ。
「人の恋路に口を出すつもりはないよ。勝手にやってて。それとも、貴女は男女間の友情は成立しないというヒト？　男と女がいれば、かならず性行為に発展するとか言ってしまうヒト？」
「なッ……！　そんなことは言ってませんから！」
「そう。なら、良いよ。私は幹也の友達。それ以上は無い。以下はあるかもしれないけどね。ところで、いいの？
幹也、後ろにいるけど」
光の速さで振り返る妹ちゃん。そんなに速度は出ていないけど。
そこには、コンビニかスーパーに行った帰りだろう、白いビニール袋を手に提げた全身真黒眼鏡が、苦笑いの表情で立っていた。
「それで、なんで良空がこの事務所に？」
「兄さんまで、名前呼び捨て……!?」

「幹也は普段から友人相手にはそうだよ、妹ちゃん。
それで、ここに来たのは、ちょっと緊急の案件でね。橙子さんに用事があったんだ」
この廃墟を囲む、薄い膜。これにも群青はあるから私にも見えるのだが、こんなもの、自然界でも人工物でも見た事が無い。よって私はこれを魔法みたいなものだと判断した。
そして橙子さんは魔法使い。それなら、私の緊急案件にも対応してくれるはず、という算段である。お金はざっと二千万円ほど出せる。
「そんなにかからないとは思うけど、僕も何処に行ったかまではわからないから、とりあえずお茶、出すよ。緑茶、飲めたっけ？」
「問題ない。でも出来れば珈琲がいい」
「はいはい」
緑茶は利尿作用があるので苦手である。珈琲もある？　知ってる。でも好き。
待つこと数分。流石に豆からではない、インスタントな珈琲が出てきた。砂糖小匙二杯、ミルク多目。うん、素晴らしい。
「何も言わずに……わかりあって……！」
「そりゃ、高校卒業からほぼ毎週会ってるからね。珈琲の好きな甘さ加減くらいはわかるよ」

「それより、妹ちゃんはなんで真昼間からココにいるの？　学校は？　住み込みで働いてるの？」
「……今日は休みです。住み込み……いえ、私の通う学校の学生寮は火事に遭って、閉鎖中なので。一時的にここを借りているだけです」
「……なるほど、礼園女学院の子だったのか。通りで言葉遣いだけはお淑やかなわけだ」
だけは、は余計です！　という反論が来るかと思っていたのだが、来ない。
おや。アテが外れた。
「――どこで、それを？　ウチで火事があった事は、揉み消され――報道されていません。学生寮の火事と、礼園女学院。どうして結びついたんですか？」
あぁ、そっち。
そうか、報道されてなかったのか。テレビ見ないからわからなかった。
「建物にも群青はあるからね。古い建物ともなれば、遠くからでも視認できる程大きいし」
「群青……？」
群青は死因を教えてくれる事は無いが、推理する事は出来る。
衰弱するようにゆっくり魅入られる場合――溺死、衰弱死、老死、そして焼死。あとは毒死と病死か。これらであると判別できる。

そしてそれが、建物となれば――焼死。つまり火事に遭う事は想像できるのだ。
ちなみに老朽化による崩壊などは、崩壊の瞬間が一瞬であるが故に、魅入りはわかりやすい。
最近で来たでっかいマンションなんかがその例だ。あれは、近いうちに壊れる。
「貴女……もしかして」
「――あぁ、良空は式や浅上藤乃と同じだよ、鮮花」
後ろのドアから、橙子さんが帰ってきた。

「不審な大男に追いかけられた、ねぇ……」
「群青に魅入られていたにも拘らず、群青を連れていなかった。あれは人間じゃない。何か守るものをください」
「考えてやらない事も無いが……何故私が守るものを作れると思ったんだ？」
「この廃墟を囲む、薄い膜。群青が元気だったから、なんとか見えました。ああいうの、他では見た事が無い。魔法みたいなものだと思ってる。魔法使いなら、そういうの作れそう」
「……完全に憶測で、か。一応訂正しておくと私は魔法使いではなく魔術師だ。それで、その大男について詳しく知りたい。群青に魅入られていて、群青を連れていないという

のは、私達の言葉にするとどういう意味なんだ？」
魔法使いと魔術師。何が違うんだろう。あんまり興味ないけど。
魔法使いって名前の方が、強そうなのに。
「……生きるモノは群青を従えている。有機物、無機物は問わない。生きているモノは、全て、群青がある。無いのは死体だけ。死んでいるモノには寿命が無いから、群青も無い。
あの大男は、群青を連れていなかった。つまり死んでいる。けど、喋ったし、動いていた。この時点で怖い。人間じゃない。
さらにアイツは群青に魅入られていた。群青に魅入られたモノはすぐに死ぬ。でも、さっき言った通り、群青を連れていない時点で死んでいる。死んでいるモノは死なない。魅入られるなんてありえない。つまりやばい。超、やばい」
「ふむ……」
あと、そんなヤツが私の名前を知っていたのがもっとやばい。
口ぶりからして、私を探していた事になる。なんであんなのが私を探していたのか理解できない。怖い。やばい。なので、頼った。
橙子さんは何か思案するような顔で、顎に手を当てて考える。あ、違う。これはエアタバコだ。今は無いけど、もしあったらあの中指と人差し指の間に煙草が挟まっている

だろう。
「群青に魅入られている、と言っていたな。死期はわかるのか？」
「――今月中には、必ず。群青に魅入られたモノが、一月（ひとつき）以上生き延びた事例は無い」
私が生まれてから、今まで。例外は見たことが――あ、いや。
「……あった。式以外、見た事が無い」
「なるほどね。それじゃあ、大丈夫だ。一応コレ……ルーンの守護は渡しておいてやるが、これ自体は気休めに過ぎない。でも、ソイツがお前を襲う事はもうないと思うよ」
「……信じる。……前も、言ったけど」
貴女も群青に魅入られているから――一月（ひとつき）以内に、死ぬよ。
その言葉は、橙子さんの人差し指によって止められた。メガネとウィンク――二重人格なのだろうか、この人は。
「はい、それじゃあお帰りなさいな。もうすぐ式がくるわよ？」
「……わかった。帰る。ありがとう。お金は？」
「十二月になったら、それを返しに来てくれればいいわ」
「……それじゃあ気が済まない。五百万、持ってくる」
命の代価。足りないくらい。
でも、上げ過ぎはよくない。それは橙子さんの目をみればわかる。

「それも、十二月でいいわ」
「わかった。幹也、またね。式によろしく。鮮花も、また」
「いきなり呼び捨て……はぁ、まぁ、いいですけど」
「うん。またね、良空」
手を振って、そこを出る。
寒い。
そういえばここ廃墟だった。あと今冬だった。
「……安心した、かも」
なんせ魔法使い……魔術師だっけ？　の太鼓判。
それにルーンなんてものが彫られた石までもらってしまった。
ちょっとワクワク。ルーンとか、ファンタジー。
家に帰るまで――私は、その石をずっとポッケで弄んでいた。
矛盾螺旋　／　了

群青所望（後）／　1

矛盾　／　螺旋

ぴんぽーん、と呼び鈴が鳴った。

来客の予定は無い。誰だろうと思いつつも、見知った群青に安堵を覚え、扉を開けた。

「や、良空」

「や、幹也。珍しいね、幹也が訪ねて来るなんて。というか初めて？」

「うん」

この全身真黒眼鏡は少なからず……否、多少なりと焦燥しているようだ。

……式の事かな。

「良空。式の事なんだけど」

「やっぱり」

「え？」

「ううん、こっちの話。式がどうかしたの？」

真黒眼鏡は人畜無害というか、周囲にほとんど影響を及ぼさない。だから、基本的に

すべてを一人で背負い込むきらいがある。頼れる人……例えばあの綺麗な赤い髪の人のような、圧倒的に頼れる人がいるのなら話は別だけど。

これは何かあったな、と思う。

「式がどこに行ったか知らないかな。十日から戻って来ていないんだ」

「……知らないけど、大丈夫だと思うよ。群青に魅入られていなかったし……」

「……そっか」

少し傷ついたような顔をした友人にハッとする。

今の私の言葉は、〝死んではいないだろうからどうでもいい〟、ともとれる発言だった。

……そのつもりはなかったけど、でも、確かに私は……そういう死生観を持っている。

「ごめん、幹也。私は、死ぬのが怖い。だから……協力できない。協力しようとすれば、私の群青が近づいてくる。

でも、……あんまり、言うべきじゃない……と思うけど、幹也は群青に魅入られていないから……ううん、違う。死ななくても……怪我は、出来るだけ避けてね」

「……ん、ありがとう。良空。心強いよ」

群青に魅入られていないのに。

その姿は、今にも死にそうで。今にも、死にに行きそうで。

「群青は、諦めたモノを好む。嘆いたモノを好む。……諦めないで」
余計なコトを、言ってしまった。
「うん」
友人は儚く笑うだけだった。
矛盾　／　螺旋　了
群青所望（後）／　忘却録音
「君は、誰かな」
「水野良空」
その邂逅は、本来有り得るものではなかった。
礼園女学院は例外を除き外部の者が入ると言う事は無い。両儀式の侵入こそが異常で、それは頻繁におこる事ではないのだ。
――ましてや、この密室、準備室の中。
刺された腹に何の感慨も抱かずに、自己の中でのみ行われる平静を乱した人物の特徴を玄霧皐月は収集する。
礼園女学院生ではない。大学生だろう年齢の少女。
特徴らしい特徴は、その瞳。揺蕩うような紺碧――否、それはこの場が暗いからだ。
明るい所なら、群青と。そう称されるだろう色をした、深い瞳。

「何か、用かな」
「――群青は貴方を気に入っている。貴方はずっと群青に魅入られていた。その死は、決まりきっていた事」
「そうだね」
一歩、また一歩と皐月に近づいてくる少女。
その姿は幽世の幽鬼のようで、家族に縋る幼子のようでもあった。
――死はどうという事は無い。私はいつだってこの結果を受け入れていた。
皐月の身体はもう持たない。
あと十分も生きればいい所だろう。
その残りわずかな空白は心地の良い物。
せめてそのわずかな時間を、自由に使い切りたかった。
「退いて」
明確に。
明確に――少女が言葉を発した瞬間、皐月から死が遠のいた。
「群青を動かした。貴方には聞きたい事がある」
「……なにかな」
遠のいたソレを採集しつつも……玄霧皐月は優しく答える。

目の前の少女は、水野良空という名前らしい。つい先ほど戦った両儀式とは違うアプローチで、死を扱うらしい。その身体はなんでもなく、どこに繋がっているということもないらしい。

群青。皐月にそれは見えないが、口ぶりからそれが何かはわかった。

「貴方は、何を望む？」

「何も」

死の間際にしても、皐月の答えは変わらない。

望みは無い。ただ、解決が欲しい。

そしてその解決は、すぐそばに在る。少女が遠ざけた場所に。

「そう」

「では、返してくれるかな、わたしを」

「……ここは貴方の準備室ではないよ」

言われて、ようやく気が付いた。

確かにそこは自分のいた礼園の準備室ではない。

どこか小さな家の一室。簡素で飾り気のない部屋。

「あぁ――」

そうか。

既に、私は。

時々あることだ。

全ての群青は一つ一つであるように見えて、根底で繋がっている。

だから、時たま〝混線〟する。

死の際――死に瀕したモノの群青と、群青を見る目を持つ私の群青が。

「……今の、誰だったのかな。なんか幹也に似ていたけど」

布団から体を起こして呟く。

あんなに神秘的な人は初めてだった。

あんなに脆いひとは初めてだった。

あの、満足そうな顔が――脳裏に焼き付いて、離れない。

／　忘却録音

群青所望（後）／

「自殺未遂、ですか？」

新年明けて、一か月が過ぎようとしていた頃。

鮮花も礼園に戻り、僕の怪我もほぼほぼ治って、いつも通りの日常に復帰しようとしていた。

そんな折、橙子さんから聞かされた話。

「うん、そう。自殺未遂が、今週に入って七件も上がってきているらしいよ」

パサ、と無造作に置かれた捜査資料を見せてもらえば、年齢も性別もバラバラの七人のリストが上がっていた。これ、警察の……。

「未遂ってことは、死ななかったんですか？」

「ああ。首吊り、飛び降り、刺傷、薬物、入水、果ては焼身に線路飛び込み。七人七様の自殺をして、その悉くが死にきれなかったって話さ」

リストには詳しい内容が載っていた。

渡辺俊哉。２８歳。男。証券会社勤め。首吊り自殺を試みるも、発見時までに縊死せず。搬送先で一命を取り留める。

佐川華子。３８歳。女。スーパーのパート。七階のベランダから飛び降り自殺。全身骨折、一命を取り留める。

藤田ゆり。２１歳。女。大学生。動脈を切断したが、出血性ショック死手前で救助、搬送。一命を取り留める。

三堂巡。４４歳。男。看護師。アルコールとコカインの併用・大量摂取でオーバードース。錯乱し病院の駐車場で暴れていた所を確保、救助。一命を取り留める。

志藤みつこ。４０歳。女。警察官。海で入水を試みるも、釣り人達の懸命な救助に

よって一命を取り留める。
花田祥吾。２２歳。男。フリーター。全身にガソリンを被り、火を点け、焼身自殺を図る。両腕、背中の炭化の末、鎮火。一命を取り留める。
尾道純也。２７歳。男。シンガーソングライター。地下鉄のホームへ飛び込み自殺するも、弾かれ、全身の骨を折るなどして意識不明の重体。
「……こういうの、あんまり見るものじゃないですね」
「まぁ、そうだろうな。自死を目の当たりにして気分の良いものなどいないだろう。だが、奇妙だと思わないか黒桐。自死への手段の差異はあれど、全員が命を取り留めている。それも、普通であれば絶対に助からない状況で、だ」
「偶然じゃないですか？　たまたまその人達の運が良かった……あ、でも、死にたいのなら運が悪かったのかな……」
「ま、普段なら警察もそれで片付けたと思うがね。自殺者達を治療した医者が、揃ってこう言ったのさ。〝何故生きていられたのかわからない。奇跡というか、不思議としか言いようがない〟ってさ。それで、私に頼ってきたというわけだ。最近立て続けに不可思議な事件を解決に導いてしまっている私にね」
やれやれ、と橙子さんは額に手を当てる。
橙子さんを頼りにしている警察関係者は、橙子さんを魔術師だと知っているわけでは

ないらしいのだが、それでも〝不思議な事件は橙子さんに頼る〟という方程式が出来てしまっているらしい。
「僕はこの七人を調べればいいんですか？」
「ああ、頼む。何か共通点でもあればいいんだがね」
「わかりました。調べておきます。……あ、ちょっと出てきますね」
「もう行くのか？」
そうではなく、今日は土曜日なのだ。
小川マンションの一件でも心配をかけたあの友人は、毎週顔を出さないとメールを入れてくるようになった。
「いえ、良空に会いに行くんですよ」
いつもの、喫茶店へ。

群青所望（後）／　2

あと数日で二月。そんな、まだまだ肌寒い季節。
「ダメですね」
「そうか」
「はい。自殺未遂の七人ですが、家族構成、勤めている会社、会社での人間関係、近所での評判、前勤めていた会社と人間関係を当たってみましたけど、共通点はありませんでした」
僕の纏めてきた自殺未遂者のリストをみた橙子さんは、難しい顔をしながらコーヒーを啜っている。大輔兄さんもこの件は追っているらしく、色々な情報をくれたにも拘らず、共通点らしい共通点はみつからなかった。
「昨日、また二件出たよ。なんと今度は割腹に感電だとさ。勿論今回も自殺未遂、死んでない」
「割腹に感電……それはまた、時代錯誤というか、準備が大変というか……」
「うん、共通点も何もないのだろうね。まるで自殺者達が共謀して色んな死に方を試し

ているみたいだ」

橙子さんのその例えに冷たい物が走る。

色々な死に方を試す――。そんなの、まるで……。

「死で遊んでいるみたいだ。トウコ、アイツがまた現れたってことはないのか？」

……今までは黙って聞いていた式が興味を持った。

式が言葉にしたように、死ぬ事よりも死までの過程を楽しんでいるようにすら見える。

「ないね。アラヤならもっと分からせないようにやるし、なによりアイツは次の世代まで出て来れないよ」

「ふぅん。でも、それって何がダメなんだ？　死んでるっていうんならともかく、生きてるんだろ？」

そう、この事件が大騒ぎにならないのは、偏に「自殺者は皆生きているから」だ。各者各様の死に方で死んだのならば、関連性や猟奇性から大事件に、大騒ぎに発展したことだろう。

だけど、自殺者は皆生きている。生きているから警察も医療関係者も詳しい事を発表しないし、報道も聴衆も興味を持たない。酷い話だけど、殺人事件や通り魔事件より、騒ぎ難いのだろう。

「オマエにとってはそうだろうね、式。たとえ六日間で九件同様の不思議な事件が起きていようと、死んではいないのだから」

「……あ」

そうか。

生き残っている事ばかりに注目していたけど――。

「たった六日で、こんなにも自殺を試みる人が多いのはおかしい……？」

「いやいや黒桐。日本全体で見れば、自殺者は一日に百人はいると言われているさ。

おかしいのはね、黒桐。

自殺者のその全員が――助けられているということだよ」

橙子さんは、なんだか面白く無さそうにそう言った。

群青所望（後）／　2

水野良空。家族構成、父、母、本人の三人家族。内両親は死去。飛行士の父親はタラップからの転落が死因。母親は自殺。親戚、辿れる限り全員が死去。

素行不良、異常言動等の過去無し。小学校、中学校の教師からの評判、「地味だけど良い子だった」が主。高校教師は「よくおじいちゃん先生のお手伝いをしてくれる子だった」とのこと。成績に特長無し。

高校卒業後から度々大事故に遭う。ブレーキが利かなくなったバイクによる追突で

頭を四針縫う怪我を負う。ビルの爆破事件に巻き込まれ、爆破の際の瓦礫に脚を潰され、骨折。暴漢に襲われ、抵抗の際に突き出した腕を包丁で刺される大怪我を負う。

「波乱万丈ってヤツ？　アイツ、高校の時はそんな素振り一切見せなかったのにな」

「うん。普通の子だった。良い子だったよ」

「ヘンな言い方だな、それ。まるで今は良い子じゃないみたいだ」

そんなつもりはなかったのに、そう言う風に聞こえたということは、そう思ってしまっているのかもしれない。

「……？　幹也、それちょっと見せてくれ」

「うん？　いいけど……何か気付いたのかい？」

式が良空に関する資料の内、大怪我の三つに関わるものに興味を持った。

バイクが突っ込んできた事件は、バイクの整備不良が原因。走行中にブレーキが利かなくなり、曲がりきれずに歩道へ侵入、運悪くそこにいた良空に追突。衝撃で運転者は投げ出され、運転者も腕の骨を折るなどの怪我を負った。

ビルの爆破事件は、そのままの事件だ。ビルが爆破されて倒壊、運悪くそこにいた良空が逃げ切れずに瓦礫の下敷きになった。犯人はビルと共に心中するつもりだったようだけど、下半身不随という大怪我を負ったものの生存している。

暴漢に襲われた事件は、犯人は同じ大学の教師だったらしい。「すぐに金が必要だっ

た」などという理由で運悪く近くにいた良空に、脅し用の包丁を突きつける。良空は断り１１０番通報。激情した犯人が良空に斬りかかり、防御に上げた腕を突き刺される。犯人は捕まっている。

「すごいな、これ。なんだか良空が事件を引き寄せているみたいだ」

「……そういう言い方は好きじゃないかな。良空は大怪我を負っているんだし……」

「――でも、死んでない」

そういえば良空は〝自分の行う行動が命を早めるかどうかわかる〟と言っていた。

だったら、何故彼女はこんなに大怪我を？

「アイツ、寿命が見えるって言ってたよな。オレの死にも似ているけど……もっと間接的だ。確か鮮花の奴と話している時に死に方もわかる、って言ってたんだよな？

じゃあさ。良空は……どうやって寿命を早めるかも選べるんじゃないか？」

――。

それは。

「それは、式。良空が……その〝群青〟ってヤツを操って、人を殺している……って、言いたいのかい」

「殺している、になるのか。この場合。ほら、いつか話しただろ。飛び降り自殺は事故なのか、って話。あの時は他殺でもなければ事故死でもないって結論付けたけど――」

「自殺させるっていうのは、人殺しなのかな」

この世界は群青に溢れている。

群青は全てを見つめている。群青を連れていない生物はいない。群青に魅入られた生物は死ぬ。

でも、私が群青を動かせば、その死は回避される。

逆に、私が群青を魅入らせれば、その生物に死が訪れる。

無機物、有機物は関係ない。〝死んでいなければ〟、〝生きている〟。

何度も繰り返したこの世のルール。生まれ出でてから見続けた群青色。

私は人を助けられる。生物を助けられる。死ぬ運命にある生き物を守ってあげられる。

「……人は一生に一人しか殺せない」

そう言っていたのは、式……いいや、織だ。

高校生の時、一度だけ彼に会った。式が群青に魅入られている事を伝えたら、〝それは俺だよ〟と笑いながら言っていた。

私は友人が死ぬ事を、見逃したのだ。

それは殺した事になる？　見殺しにしたことになるのかな？

……もしそうなら、私は大量殺人者だ。殺人鬼だ。
父も、母も、親戚も、友達も、知り合いも、見知らぬ人も――みんなみんな殺してきた。
でも、それでも。
死にたくない。私は死にたくない。
ずっと、ずっと、ずっと……死を間近に感じていた。すぐそばを死が通り抜けていた。
「……でも」
空を見上げる。蒼穹。群青ではない。
突き抜けた快晴は、しかしその空にも群青は舞っている。
死は怖い物だと思っていた。死は苦しい物だと思っていた。死は辛い物だとおもっていた。
でも。
この間……混線した、知らない誰か。
あんなに満足そうな顔は見た事が無い。望みは何もないと言ったその言葉が本心であると否応に理解させられた。充足し、満足し、〝解決〟を――〝答え〟を得て眠れるのなら、あんなにも〝幸せ〟なのか。
「……いいなぁ」

私もあれが――欲しいなぁ。

土曜日になった。

金曜日までの九日間で、自殺未遂者は十七件にも及ぶ。様々な自殺方法で、しかし生きている。必ず、誰かに助けられていた。

今日は良空に会う日だ。

「……所長、行ってきます」

「ああ。……気を付けろよ」

何に気を付けるというのだろうか。

いつも通り、良空に会いに行くだけなのに。

いつもの喫茶店で、いつも通りの近況報告をするだけなのに。

ああ、でも。

いつも通りの顔が出来ているかどうか――鏡を見て確かめないと。

群青所望（後）／　3

「良空」

「や、幹也」

良空はいつも通りの席に座っていた。既に飲み物は注文済みのようで、ストローを口

に咥えながら本を読むという、少々行儀の悪い姿で僕を認めた。口から放たれたストローが氷をカランと鳴らす。

対面の席には僕の分もある。お金に余裕がある時は、時たまこうして奢ってくれる。逆もあった。

「近況報告と行こうか、幹也」

「……」

「幹也？」

「あ、うん」

彼女の対面に座る。

良空はいつも通りだった。何かを気負っているようにも、思いつめているようにも見えない。

良空の瞳は、元から少し青い。群青色とは言えない青さだけど、どこか先祖に国外の血が混じったのだろうか、その青みはどこか浮世離れした印象を抱かせる。

そう——夢を見ているような。

「流石にそこまでじっと見つめられると照れる」

「良空が照れる事って、あるのかい？」

「ないかな」

やっぱり。
やっぱり、いつも通りの良空だ。
人を殺すなんてありえない。誰かを自殺に追いやるなんてありえない。
「ところで、幹也」
この子は、名前の通り善良な――。
「最近起きてる、連続自殺未遂者事件って、知ってる？」
良空は、疲れたように溜息を吐いて……そう聞いてきた。

群青所望（後）／　3

群青劇　／

黒桐幹也が水野良空に話しかけられたのは、クラスが一緒になって彼女が前の席に座ってすぐのことだった。

彼が読書用の本を取り出し、今まさに読もうとしているところで振り向いてきた彼女が〝よろしく〟と言ったのが始まりだ。

今に思えば、その時の彼女は厭にゆっくりと振り向いてきた。まるで、中に漂う何かを目線で追った結果、その先に黒桐幹也がいた、とでもいうかのように。

そんな些細でありふれた発端（はじまり）。それだけで、式と良空。見た目で言えば対極に位置するこの二人と、黒桐幹也は高校生活を送ったのだ。無論、彼には他にもたくさんの友人がいたが。

高校時代の教師に彼が訪ねたように、そして彼の記憶に在る限りでも、良空はとある高齢の教師を気にかけていたように思えた。荷物を持つ事、階段の上り下り、雑用。それは姿形を〝地味〟で纏め上げている良空にしては、少しだけ目立つ行為。

その教師の担う授業の単位を選択していなかったため、ごますりであるとは思われな

かったようだが、それについては友人間で周知の事実になるくらいには、有名な事だった。

高齢の教師は、黒桐幹也、水野良空たちの卒業前、卒業式に参加する事無く亡くなった。

「黒桐。寿命という言葉は、他にどんないい方をするか知っているか？」

「言い替え、類語って事ですよね。うーん……運命とか、天寿とか、終生とかでしょうか？」

「じゃあさ、寿命が来ることが分かる、というのは一般的になんて言う？」

蒼崎橙子の問いに黒桐幹也は少し考える。

考えて、深く考えずに、彼は言葉にした。

「死期（シキ）を悟る――ですかね」

「そう。寿命というのは言い換えると死期だ。だからさ、その高齢教師と水野良空が一緒にいたのは――その教師の、死期を悟っていたからなんじゃないか。だから、最後だけはと尽くしてあげた」

「……シキを悟る」

彼は改めて言葉にしてみて、おもしろいなと思った。

意味合いは余りよろしくない単語だけど――彼女と同じ読みを持つモノを、良空は悟

る事が出来る。見る事が出来る。

「……これは完全な蛇足だがね、黒桐。

寿命を受け入れる……本人が寿命を悟った場合は、もう一つ違う言い方がある。少々詩的な表現だが……潮が引くように死ぬ、なんて言い方を聞いた事がないか？」

何かに気づいたように橙子は話し始める。

何かを皮肉るように。意地悪い笑みを浮かべて。

「あぁ、長く生きたお年寄りが、人生に満足して……それまで元気だったにも拘らず、ってヤツですよね」

「そう——寿命は潮の満ち引きでも表されるんだ。

それでさ、黒桐。日本の神道については少しくらい知っているか？」

「ええ、まぁ。多少なりとは」

「潮盈珠（しおみつたま）と潮乾珠（しおふるたま）という神珠がある。海幸彦山幸彦（うみさちひこやまさちひこ）という神話に登場する竜宮の珠なんだがね。コイツは潮の満ち引きを操る事が出来るんだ」

咥えていた煙草を灰皿に押し付けると、橙子は疲れたとばかりに背凭れへ身体を預けた。

いつか式の名前に対しても言っていたように——出来過ぎだよ、と。

「——この珠を人間に授ける神の名を、阿曇磯良（あづみのいそら）という。もしくは安曇磯良と書いて—

—あずみのいそら、と読む事もあるね」
群青劇　／　了
群青所望（後）／　4
「知ってるよ。今週に入ってもう十七件。流石に、知ってる」
「そっか。……幹也はどう思う？　結構凄惨な事件だと、私は思うんだけど」
良空はカラカラと氷をストローで回しながら、俯き加減に問うてきた。迷っているようにも、悩んでいるようにも——自慢しているようにも見える。
こういう事件の問題提起はずっと僕がしてきたから、なんだか不思議な気持ちになりながらも、答えないわけにはいかないと言葉を探した。
「うん。自殺をする人の気持ちはわからないから、何とも言えないけど……死にきれないのは、辛いのかな、って思うよ」
「どうだろう。一時の迷いで死にたくなったとしても、生きていたら希望が湧いてくるかもしれない。焼死直前だった人とかもいたから、一概には言えないけど」
——自殺未遂者は生きている。生きているから、詳しい状態は公開されていない。
「死ななかっただけ……それは生きているって言えるのかな」
「死に損なっても生きてれば生きているんじゃない？　死ななければ、生きているよ」
「じゃあ良空は、連続自殺未遂者事件の彼らが——助かった、って思っているんだね」

良空の口から、今まさに飲み物を吸おうとしていたストローが離れる。
俯いた顔色は伺えない。肩は強張っているようにも見える。
「助かった――っていうか、助けてもらった、でしょ？　よっぽど恵まれていたんだろうね。全員が全員、救助されているなんてさ」
顔を上げない良空の口から漏れ出でる言葉はいつも通りのもの。
震えていないし、強張ってもいない。
それがどうしてか、浮世離れしている印象を受けた。
「恵まれている――自殺者が？」
「うん。自分を殺そうとしているのに、それを止めてくれる人がいるなんて……止めてくれる人が間に合うなんて、幸運だと思わない？」
「……自殺未遂をした人を、僕は〝恵まれている〟なんて表現は出来ないかな……」
「そう？　そのまま死んでしまったなら不運だろうけど、助かったんだよ？」
「自分を殺すにまで至った人が、幸運だとは思えないよ」
カラン、コロンと……カップの中の氷が回る。
ストローに掻き混ぜられて。
「……じゃあ幹也は、そのまま死んだ方が幸運だった、っていうの？」
「そうは言ってない。そもそも自殺しない選択肢が出来れば幸運だった、って言ってい

るんだ」
「……それが出来なくなった時点で、生きていようが死んでいようが不幸、ってこと？」
「……うん。今の時点で、僕はそう感じている」
「なにそれ」
少しだけ怒った声の良空。
顔を上げた彼女の口元は、わかりやすいくらい〝へ〟の字に曲がっていた。
「助かったなら、感謝するでしょ。普通。助けてくれた人に、ありがとうって。それで自分は幸運だったなぁって思うでしょ」
こんなに感情を励起させている彼女は初めて見た。
憤り。怒り。彼女がこれらを現したところなど、見た事が無い。
「良空、落ち着いて。僕は、って話だよ。僕は自殺をしようと思った事が無いから、彼らの気持ちはわからない。彼らは助けてくれた人にありがとう、って思っているかもしれない」
「……かもしれない、じゃ困る。それじゃあ、なんのためにやってるのかわかんないじゃん……」
「え？」
どういう、意味だろう。

それは。

それは――まるで、良空が感謝されたい、とでもいうような。

「良空、それって……」

「もう、いい。だったらもう――」

良空は飲み物を飲み干して、立ち上がる。

飲み終わったカップを持って、バッグを持って。

「良空！」

「もう知らない。どうなっても、知らないから」

それだけ言って――良空はカップを乱暴に返却口に突っ込んで、喫茶店を出て行ってしまった。

「……はぁ」

溜息を吐いて、背凭れによりかかる。

ケンカ。鮮花との言い合いはよくあるし、二年前は式とも口論になったけど……良空とこうなるのは、初めてだ。

良空は何に怒ったのだろう。

なんのためにやっているのか――感謝されるために、自殺者をつくって、助けている？

そんな――そんな外道を、彼女が行えるというのか。
あまつさえ、生きていれば幸運、だなんて――。
「……はあ」
先程よりも大きなため息を吐いて、僕も立ち上がった。
事務所へ帰ろう。

「自殺者、ですか？　未遂者ではなく……」
「ああ。未遂者ではないから警察は関連性を見ていると言う事は無いようだけどね。とある喫茶店の従業員が自殺したそうだよ。つい先ほどの話さ」
そう言って橙子さんはメール文を見せてくれた。紙類にまとめていない辺り、本当についさっきの事なのだろう。
その、喫茶店は。
「……橙子さん」
「うん？」
「これ……さっきまで僕と良空がいた喫茶店です」

群青所望（後）／　4　了

群青所望（後）／　4

群青所望（後）／　4　了

雲行きが怪しくなってきた。

私は良空なんて名前だけあって、晴れ女だ。別に関係はないのだろうけど、行く先々で雲が引いていくから、晴れ女と名乗っても良いと思う。

傘を持っていない時に雲行きが怪しくなる事は生まれてからただの一度も無かった。

ようやく運が私を見放したか。

それとも、私以上に強く作用する雨女、雨男が近くにいるのか。

もうすぐ二月の雨は冷たい。早く帰らないと。

「……お嬢さん、此処で何をしているんだい？」

声を掛けられて振り向くと、そこには痩せこけた頬のおじさんが立っていた。目元には隈があり、何日もお風呂に入っていないのか、体臭がきつい。

浮浪者――もしくはホームレス。同じ意味かどうかは考えない。

「……」

「あぁ、安心してくれ。別に何もしないよ……何をする気力も、ないからね」

おじさんはフラフラした足取りで近づいてくる。
近づいて――私の横を、通り過ぎた。
「……少しだけ、ありがたいかな。一人は寂しかったんだ……沢山働いて、沢山苦労してきた人生を……独りで終えるなんて、あまりにも寂し過ぎる。誰か知らないけれど、君みたいな若い子に看取ってもらえるのなら……私の人生にも意味があったのかもしれない」
群青がおじさんの顔の前で鎮座している。
もし群青に顔があれば、舌舐めずりでもしていそうな距離だ。
カン、カン、と音がする。脚立を昇る音。
ギシ、と音がする。ロープを掴む音。
振り返る。
「今まで頑張って生きて来たけどさ……昨日、ちょっと、死にたくなったんだ。もう、いいかなぁって。私は、俺は、十分に頑張ったから、って……」
「……貴方は、今、不幸？」
私が言葉を発すると思っていなかったのだろう。おじさんは少しだけ目を瞠る。カシュ、という音。手に持った缶ビールを開いた音。
おじさんは柔らかく私に微笑んだ後、それを一気に飲み干した。

「いいや、幸運だよ。
……んぐ……ん。……ふぅ。
……だって、俺のどうしようもない人生に、ようやくピリオドが打てる。それを記憶してくれる人までいる。これ以上の幸運があるかい？」
「……私は何もしないよ」
「うん、それでいい。ありがとう。そうしてくれることが――何よりの救いだ」
おじさんはゆっくりとロープを引っ張って、輪っかになっているそこに自身の首を乗せる。大きくため息を吐いた。いや、深呼吸か。
自殺。自分殺し。自らを殺す。
そこに至ってしまった者は、なんであれ不幸。
「……ごめんね」
「え？」
「もしかしたら……今からの光景は、君にとってトラウマになるかもしれない。君の心に傷をつけるかもしれない。でも、もうつらいんだ」
おじさんは、脚立を蹴った。
宙吊りになる体。上質とは言えないロープがおじさんの首へと喰い込んでいく。
蒼褪めるその肌と苦悶の声。赤らむ頬は緑に変色していく。

連動して、群青がおじさんの中へと入って行く。
「ガ……ッ……」
ジタバタ。
手足をめいっぱい暴れさせて、目をめいっぱい開いて……その行為が、首への締め付けを増長させる。
「――」
そうして。
そうして、おじさんは……動かなくなった。目、口から液体を零して。依れたズボンも異臭を放っている。
おじさんは自殺した。名前も、何をしている人かも知らないおじさん。
「……幸運だ、って言ったのに。つらかったの？」
群青がおじさんから離れて行く。寿命は死体に興味が無い。
先程まで暴れていた事で発生した慣性力だけが、おじさんをぶらんぶらんと揺らす。
ついさっき大通りですれ違ったおじさん。私の事は覚えていなかったようだけど。
進行方向へ先回りして、この廃倉庫を見つけて。
「でも、ありがとう、とは言われた」
なるほど。

助けなくても、看取れば言われるのか。
ゴロゴロ……と神鳴りが聞こえる。
そうだ、雨が降りそうなんだった。
帰らないと。

群青所望（後）／　5

雨が降ってきた。
これは間に合わないと思ってコンビニでビニール傘を買っておいて良かった。
人通りの少ない郊外へ向かう道は、車通りも少なくていい。車は、水を跳ねるから。
曇天はあまり好きじゃない。青空より、鮮明に群青が見えてしまうから。
世界に溢れる群青。路地裏で寒さに怯える野良猫にも、雨に濡れまいと葉陰で翼を畳む鳥にも、傘を差さずに肩を落として歩く少女にも、等しく群青がついている。
「〜♪」
雨が音を掻き消してくれるから、雨自体は好きだ。歌を歌っても気にされない。
嫌いなのは灰色の空だけ。雨も、風も、好き。
野良猫と少女は群青に魅入られていた。樹上にいた鳥だけが、元気な群青を侍らせていた。あの鳥はまだまだ生きて行くだろう。
野良猫の群青を動かしてあげた。これで、誰かが拾ってくれるか、雨の後も生き延び

るだろう。
あの女の子は、いいや。
「～♪」
チャプチャプと音を立てて、郊外の方へ歩いて行く。
住宅の数がどんどん減っていく。
代わりに増えて行くのは木々。森林公園が近い。
出先で雨が降るのは初めてだから、ついつい寄り道もしてみたくなる。
雨の景色、というものを見る為に、公園へ立ち寄る。
中ほどまで歩いた辺りで、懐かしい顔に出会った。
「久しぶりだな、良空」
紺の着物の上に、赤い革ジャン。ミスマッチ。でも彼女が着ると似合ってる。
近くには脱ぎ捨てられた黄色の雨合羽。なんで脱いだのだろう。
「や、久しぶり。式」
雨足が強くなる。
あぁ、雨女は式だったのか。
「おかしいな。やっぱり、実感が湧かない。昔からそうは思ってなかったけど、おまえはオレとは違う。やってることはケダモノのそれなのに――なんでだ？」

「そんなの、わかりきったことだよ、式。
私は人殺しじゃないもの。人殺しは貴女だけ。そうでしょ？」
目の前の少女は殺人者だ。
だって、私は見た。あの夜――彼女が首切り死体の前で嗤い、幹也を傷付ける所を。
だから私は彼女に会いたくなかったんだ。私が行っても式は喜ばない。目撃者が来て喜ぶ殺人者なんて、どこにもいない。
彼女の群青を見る。元気だ。
私の群青を見る。少しだけ、いつもより大人しい。
それは、恐ろしい事だった。
「……私は死にたくない。嫌だよ、式。私は死にたくないから――殺したくもない」
「じゃあ――こっちに向けているその手は、なんだ」
「だって、殺されそうなら――殺すしかないじゃん」
それは、ふたりを動かすに十分な動機だった。
群青所望（後）／　6
メキ、と音を立てて森林公園の樹木が式の方へ倒れてくる。一本だけではない。立て続けに二本、三本と、根元が腐り果てた樹木が倒れ被さってくる。
だが、姿勢を低くして疾走の準備をしていた式に追いつく物では無い。彼我の距離、

十メートル。それは一瞬にして――二・五秒の間に、式は良空の前に辿り着いていた。
良空が付き出した腕の真横に。
ナイフによる刺突。
その切っ先が狙っている場所は、心臓でも頭蓋でもないが――良空はその神速の突きに対して、ただ視る事で対応した。
ぐず……と崩れ出すナイフに、即座にそれを捨てる式。
地に落ちたそれはボロボロに崩れた。赤錆と共に。
式の両目は青白く光っている。良空の両目は群青に光っている。
どちらもが死を見る瞳。万物に死を告げる目。
だが、式の方が些か直接的だ。
その事実に式は嫌気が差して、右手の人差し指で自身の両目を潰す――。
「へぇ、これが死にたくさせるってヤツか。怖い怖い」
「ッ！」
――前に、右手の手首を式は左手で掴んだ。
それだけで、式に右手の感覚が戻る。いや、正確には、右手と意思を統一した、とでもいうべきか。
「でも、残念」

式は薄く嗤う。先程までの良空は到底殺人鬼には見えなかったけど――今の良空は、完全に同類だ。どうしてさっきまではそう思えなかったのかわからないが、今がそうなら、それでいい。

ただ問題は一つ。

全く、視えない。

「……貴女の方が深い。けど、チャンネルは同じ。だから、貴女は既に視えている。ただ、視ている場所が深すぎて、視えなくなっているだけ」

「へぇ、わかるのか」

「私は、貴女より長く死に触れてきたから。生まれた時からずっと、傍に死があったから」

モノの死が視える。それは良空にとって、当たり前のことだった。群青色は決して良空の味方ではない。虎視眈々とその機会を伺う死神。それが群青だ。

死を視るチカラにおいては式の方が何倍も上だろう。だが、死を回避するチカラでは――シキを悟るチカラにおいては、良空の方が上なのだ。

「ねぇ、なんで私を殺すの、式」

式は答えない。不思議そうな顔をして、立ち止まった。

「私はただ――ありがとう、って言われたかっただけなのに」

良空はソレを知らないから。ソレに似ているモノを欲しがった。
「良空、もしかしてオマエ――」
「――そのために痛いのも、見たくないものも、我慢してきたのに！」
カッ、と――、
世界が、瞬いた。
群青所望（後）／　7
雨が降り始めた頃、僕は事務所に帰って来ていた。
「これで三件目。自殺者はホームレスの五十四歳。厨川（くりかわ）雄二。廃倉庫で首吊り自殺。手当たり次第、という風にも見えて来たな」
「……」
「黒桐、水野良空は」
「良空は……そう言う事をする子じゃ、ないと思います」
「……そうは言うがね、黒桐。これだけの被害は――」
ドン、と。
カバンから取り出した書類を橙子さんの机に置く。
目を白黒させている橙子さんの前にそれを見やすいように広げた。
「……これは？」

「バイク事故を起こした藤沢卓巳、爆破事件を起こした工藤直子、良空を襲った佐上直哉。彼らについての調査結果と、自殺未遂に終わった十七人の再調査結果です」

橙子さんは顔を顰めながら、それを検分し始める。

次第に深くなっていく眉間の皺。しかし、ある程度読み進めた橙子さんは、もういいや、と言って書類を机に置いてしまった。

「所長、ちゃんと――」

「いや、いいよ。わかった。数枚見ればわかる。

つまりさ、お前はこう言いたいんだろう、黒桐。水野良空は無理矢理自殺をさせてからソイツを助けているのではなく――たまたま居合わせた死の運命にある奴を、身を挺して助けていたんだ、ってさ」

そう。

三件の内、三件とも――良空がいなければ死んでいただろう、という事を証明した書類。

バイク事故の運転手は、飲酒をしていた。バイクの整備不良でブレーキが利かなかったのは事実だが、当時の速度のまま走っていれば大事故必至だったという。

もし良空を撥ねて転倒していなければ、運転手は死んでいたかもしれないと、大輔兄さんは言っていた。そして、良空は家とも大学とも関係の無いそこに、何故かいた、と

も。

爆破事件の犯人は下半身を瓦礫に潰されたが、何とか生きていた。犯人と同じ階――駐車場に良空はいて、彼女も怪我をした。爆破予告はしてあって、館内放送もしてあった。逃げる時間は十分にあったのだ。犯人は病院でうわごとの様に、自分を睨みつける少女の亡霊がいた、などと呟いていたらしい。

良空を襲った教師はクスリをやっていて、服毒死一歩手前だった。逮捕後、今尚治療中だという。逮捕されていなければ奪った金を使い、クスリの購入に使っていた事だろう。

「よくもまぁ、この短時間でこれだけ調べたものだよ。その辺の探偵でも無理だ」

「それで、所長。これを見てください」

書類の一番下。

あまり気分の良い物ではないから一番下にしていた、黒い背景色に白字の掲示板を印刷したモノ。

顔を顰めながらその書類を手に取った橙子さんは、内容を目で追っていく内に、嫌気が差したのだろうもう一度煙草を手に取って、今度はしっかり火を付けた。紫煙を吐き出す。

「……なるほど。完全パスワード制の自殺者掲示板ね……これは見つからないワケだ。

こんなもの、どうやって見つけた？」
「入水自殺を試みた警察官の志藤みつこの携帯から見つかったサイトです。自殺したい人が書き込みをすると管理人が自殺場所を用意してくれる――そういうサイトみたいですね」
最近あった自殺未遂事件、その全てがここに書き込まれていて、どうせ死ぬならこういう手法が良い、こういう手法を試してみないか、等という吐き気を催す書き込みまで見つかった。
既に警察は管理人のＩＰアドレスから調査を始めている。
「水野良空は何かの経緯でここを見つけ、自殺者達を助けていた、という事か。なるほど？　それなら喫茶店で水野良空が起こした癇癪にも納得がいく。書き込みがある度にわざわざ足を運んで助けていた自殺者達を、どちらにしろ不幸、だ等と言われてはやる気も無くなるだろうね」
「……はい。今から良空の家に行って謝ろうと思っています」
「……式は良空が殺人者だと思ったまんまだから、克ち合っていないといいんだが」
その時、郊外の方で稲光が輝いた。
遅れて、大きな雷鳴。どこかに落ちたかもしれない。
「行ってきます」

「あぁ、気を付けろよ」
　まだ雨が止む気配は無い。
群青所望（後）／　7　了

群青所望（後）／　5

天から落ちてきた膨大な熱量を肌で感じながら、しかし私の心は穏やかだった。
何故？
死なないことが分かっているから？
確かに私は群青に魅入られていない。でも、目の前の人殺しもそれは同じ。私と彼女のチャンネルは同じで、彼女の方がより深いのだから、たとえこの雷で死ぬ事が無くとも、彼女になら殺されてしまうかもしれない。
私はそれが怖かった。
怖いと同時に――焦がれていた。
熱く。熱く。焼け焦がれるような感覚が脳を灼き、支配して離さない。
先日混線した、名前も知らない誰か。彼の満足が、彼の平和が、アレが欲しくてたまらない。
彼はお腹を刺されていた。自殺ではないだろう。あれは、誰かに刺されたのだ。
だが、死を受け入れていた彼は――あんなにも穏やかだった。

あそこまでになれるとは思わない。あれは完結していて、完成している人間だったから。

でも、近づきたいと思うようになるのに時間はかからなかった。

ただ、私は、欲張りで。

未だ味わった事の無い〝ソレ〟だけは、死ぬ前に欲しいと――そんなことを思ってしまった。

自殺は嫌だ。絶対に厭だ。

だから、他殺が良い。殺されたい。彼の様に、殺されて、〝平和〟を得たい。

そんな破滅思考から、自殺希望者たちの集うサイトを見つけて。

でも、私は欲張りだから。

〝不幸〟な人たちが〝不幸〟なままに死んでいくのが、許せなかった。書き込みをした人が誰かは分からなかったけど、管理人なる人物が用意する場所には心当たりがあって、手の届く限りは助けた。まるで玩具の様に、やってみようか、なんて軽い言葉で示されていく自分を殺す手法に吐き気を催しながら、群青を用いて彼らを助けて回った。

昔からそうだった。死の運命にある人を――群青に魅入られている人を、放っておけなかった。

放っておくのは、本人から助けは要らないと言われた場合だけ。

余程の事が無い限り群青に従う。その言葉に嘘偽りはない。
だから、私にとって群青から人を救うのは、余程の事なのだ。
でも、それも最近、自身の本音を覆い隠すための建前なのだと気付いた。
そう。
私はただ、ありがとう、と言われたかっただけ。
心が温かくなるその言葉。ママも父さんもくれなかったソレを、私が助けた人は言ってくれる。だから、必死で助けた。誰か一人くらい気付いて、言ってくれるんじゃないかって。
それを幹也に否定された時は、思わず怒ってしまった。これで私が彼女に殺されたら喧嘩別れだ。大切な友人なのに。子供みたいな癇癪を起さないで、すぐに謝ればよかったかな。
でも、これは譲れないことだから。
ああ。
もう、白光が近い。
この神鳴りで死ぬ事がないとわかっているのに——これは走馬灯なのかな。
式は左腕を天に掲げている。
違う。

あれは――ナイフ？
「――万物には、全て綻びがある。大気にも――雷にも」
式はそのナイフで。
雷を、殺した。

轟音諸とも、天からの怒槌は死に絶えた。
雨の音だけが嫌に響く。
蒼崎橙子謹製の義手に仕込まれていたナイフを天に掲げたままの姿勢だった式は、それをゆっくり、呆然と立ちすくむだけの良空へ向ける。
そして――、
「やめた」
――踵を返した。
「……どう、して？」
「何が？」
「私を殺さないの、式。あなたは人殺しでしょう？」
「なんでオレが自殺の手伝いなんかしなきゃならないんだ。死にたいなら勝手に死ね」
式はそれだけ言って、振り返ることなく歩き出す。

雨は止まない。ただ、雷はどこかへ去って行ったらしい。
ただ、雨が降り注ぐだけだ。
「……ちぇ」
式の姿が見えなくなってから、良空も動き出した。
悲壮感はない。茫然自失と言った様子でもない。ただ、少しだけ悪びれている。
「式なら殺してくれると思ったんだけどなぁ」
言葉は雨に掻き消されていく。
一つ伸びをして。
何も無かったかのように、良空も歩き出し、
「良空！」
その声に、顔を上げた。

良空の家に向かう途中にある、森林公園。
そこで轟音がしたという話を聞いて、向かってみた所、案の定とでも言えばいいのだろうか、良空が立ち竦んでいた。
捨てられたビニール傘と雨合羽。倒れた三本の木。
良空はこちらを向いているのに、僕に気付いていない。俯いたままだ。

彼女に声を掛けると、ようやくその顔を上げた。
まるで迷子になった子供みたいだ、という感想を抱いた。
「あれ、幹也。どうしたの？」
「……謝ろうと思って。良空のしてきた事、否定するような風に言っちゃった事」
「ああ……別に、私が子供だっただけだから、いいよ。こっちこそごめんね、あんなふうに怒ったりして」
ゆっくりと此方に歩いてくる彼女。意気消沈している様な素振りはないのに、落ち込んでいるように見えた。
「……良空」
「何、幹也」
「一つ、聞いてもいいかな」
ビニール傘を拾った彼女は、それを差した。
顔の見えなくなった良空。でも、頷いたように見える。
「君は三歳の時から独りで生きてきた。近所の人に聞いたよ。小さい頃からよくお手伝いをしてくれる子だった、って」
「ん」
「良空。君が欲しかったものは、本当に〝感謝〟なのかな」

クルクルと回されていたビニール傘が、ぴたりと止まる。
あの時良空は、感謝してもらいたい、という風な発言をしていた。
でも、それなら〝群青〟なんていうよくわからない方法を使わなくても、人助けをしていれば自ずと得られるものであるはず。
「……ありがとう、って言われると、心が温かくなる。ママと父さんはこれをくれなかった。二人が死ぬときに、助けなかったから。だから」
「感謝と親愛は違うよ、良空」
「……」
良空の育った環境。それは、お世辞にも〝良い物である〟とは言えないものなんだ。
子供が貰って然るべき〝ソレ〟――親からの愛というものを知らずに育った良空には、感謝と親愛の区別がつかない。
身を挺してまで自殺者や犯罪者たちを救って来たのは、それをくれると思っていたからなんだ。
「……そうだったんだ」
そう、だったんだ。
良空は二度、噛みしめるように呟いた。
雨足が弱まっていく。

「……私ね、幹也」
「うん」
「死にたかったんだ。幸せがずるいと思ってた。私には誰もいないから、それをくれる人がいないから、感謝で穴埋めをして、でも足りなくて。ちょっと前にみた、幹也に凄く似ている人が、あんまりにも幸せそうで、平和そうだったから……私もあれが欲しいって思った」
　ぽつぽつと話す良空の声は震えている。
　寒いのか、つらいのか。苦しいのか。
「私が初めて自殺を見たのはね、三歳の時。ママの自殺。父さんがいない世界に意味は無いから、って。つらいから、って。私は父さんが転落事故で死ぬのも、ママが自殺をするのも、知ってた。父さんの時はどうしたらいいかわかんなかった。ママの時は、つらいなら助けない方がいいって思った」
　また、ビニール傘がくるくると回り始める。
　その懺悔のような呟きは、決壊したダムのように溢れ出てくる。
「ギャンブル好きだった叔父さんが群青に魅入られていた。旅行に出かけると浮かれてた叔母さんが群青に魅入られていた。小学校の通学路にいた犬。可愛かったよ。撫でても噛まないし。でも、群青に魅入られてたよ。私の家に巣をつくった雀も」

取り留めのない言葉。後悔している事が伝わってくる言葉。
「みんなが死ぬ事を知っていて、私は見殺しにしてきた」
「それは良空の責任じゃないよ」
「そっか。……高校の時のお爺ちゃん先生、覚えてる？」
「うん」
「私、思い切って先生に言ったんだ。もうすぐ死ぬよ、ってこと。……なのに、知っているよ、って。教えてくれてありがとう、でも大丈夫だから、って。群青なんか視えなくても、先生は自分が死ぬ事を知っていた。私はあの時学校を休んで、先生の最期を看取ったんだ。家族の人は来なかった。独りだったけど、私にありがとうって言って、笑って死んだ」
そうだ。
確か良空は、その日だけ学校を休んだ。皆勤賞だった良空が。
「その時、初めて知った。死ぬのは悲しい事だって。ありがとう、って言われたのに、死んじゃったら全然嬉しくないし、心も温まらないって。だから、死なないように助けて、生きていれば、ありがとう、って言葉も……」
高校生でそれに至るには、良空は余りにも幼すぎたんだろう。
諭してくれる親はいない。教えてくれる存在はいない。

感情が育つ前に効率を覚えてしまった良空にとって、それがどれだけの衝撃だったのか、僕にはわからない。

「……結局、誰も言ってくれなかったし。感謝と親愛が別モノなら……無駄だったんだね」

「それは違う」

思わず、言葉を発してしまった。

でも、本心だから。

「君のおかげで生きる勇気が湧いた、という人は沢山いたよ。あの自殺掲示板の人達、全員じゃないけど、〝奇跡的に助かった命をつまらない事で散らしたくない〟って。〝神様が死なないで、って助けてくれたんだ〟って。医者も皆口を揃えて奇跡だ、って。確かに誰も良空の事は知らなかったけど、君の行為が無駄だなんて……そんなことは無い……はず、だよ」

「なんでそこで尻すぼみになるのさ」

「その人達にちゃんと話を聞いたわけじゃないから……」

大輔兄さんから聞いた話だし。

くるくると回っていた傘が止まる。

良空はそれを、閉じた。

「雨、止んだね」
「ん。良い空。私は晴れ女だから」
「それじゃあなんで、今まで雨が？」
「式がいたからね。式はとびっきりの雨女」
……それは納得。
雪まで降らせてしまうのだから、式はとびきりだ。
「良空。今も死にたい？」
「んー……どうだろ。確かにまだ羨ましいけど……私が欲しかったのは親愛なんでしょ？　愛って事は、好きな人でも見つけなきゃもらえなそうだし。それを見つけてからにするよ」
「そっか」
恋愛と親愛は違うと思うけど……その辺りの違いを説明できるほど、僕も愛恋に精通しているわけではない。……自分の事で精いっぱいだ。
「そういえば式がいたって、どういうこと？」
「あ、それぶり返す？　ん～、そうだね、式のせいであの木が倒れたって感じかな。決して私のせいじゃない」
それってどういう事？　と聞こうとして。

歩き出した良空の方へ顔を向けた瞬間――バン！　と。
ビニール傘がこちらに向かって開かれた。水は切ってあったようだけど、音に驚く。
「それじゃ、ちょっと行きたい場所が出来たから！　それ、あげる」
「え、いらないよ……あぁ、もう」
重力に従って地面に落ちたビニール傘を拾う。
走り出した良空はもう見えなくなっている。こんなもの貰ってどうしろっていうんだ。
「……あれ」
傘の裏側、骨組みとビニールの間に何か……というか、お金とメモが挟まっている。
〝慰謝料と弁償金！〟
「……律儀っていうか」
ソイだなぁ……あ、いや、マメだなぁ。
そんな感想は、雨雲の引いた冬空に消えて行った。
群青所望（後）／　了
自殺測定　／
夢を見ているみたいだ、と言われた。
初めに言って来たのは父さんだ。

この子の瞳は夢を見ているみたいに、綺麗だね。そんなことをママに言っていたと思う。

次に言われたのは、多分小学校。良空ちゃんはいつも夢を見ているみたいだね、と教師に言われた。どうして言われたのかは覚えていない。

その次は中学に上がってから、かな？　私の夢遊病のような深夜徘徊を知った友人に、夢を見ているんじゃないか、と。

そして、高校生。

お爺ちゃん先生にも言われた。

良空さんの瞳は、夢を見ている瞳だね。大丈夫、もうすぐその夢から目覚めさせてくれる人に出会えるよ。

……確か、こんな感じ……だったと思う。

もう思い出せなくなってきている事実に愕然としながら、そこを目指す。

「……あった」

そこ――お爺ちゃん先生のお墓。

やっぱり家族がいなかったらしいその先生のお墓は、当たり前だけど共同墓地だ。私がお墓のお金を出す事も考えたけど、教師と生徒という関係でしかない私では、それになり得なかった。

お寺の住職さんが毎日綺麗にしてくれているのだろう、共同墓地の墓石は苔もなく、線香も香ったままだったけど、先程コンビニで買ってきたお線香に火をつけて、入れる。
黙祷。
「……良く考えたら、先生がくれた最後の〝ありがとう〟って」
近所の人のとは違う。幹也には悪いけど、自殺掲示板の人達がくれたものとも、違う。
私の手を握って、もう見えていなかっただろう目で、私をしっかり見つめて。
あの時に言われたありがとうこそが――親愛だったのかな。
「……うん。私の方こそ、ありがとう」
私は晴れ女なので、良い空が似合う。うん、自負は良い事。うん。
そう、お墓参りは晴れている方が絶対にいい。
群青は死体に興味が無いから、ここは普段より群青も少ない。良い気分。
さぁ、帰ろう。
誰もいない我が家。でも、私の家。
……しかし、親愛を貰うには結婚しないといけないんだろうか。
……結婚かぁ。
「まだいいや」
私にはまだ、早い。うん。とりあえずあのぎこちない二人の結婚を見届けてからにし

よう。式みたいな人殺しでも、幹也みたいな無害の塊と一緒になれば丸くもなるだろうから。

あ、そう言えば。

「……間に合うかな？」

走って家路を急ぐ。

家路――近所に住む、中学生の少女が住む家の方へ。

息を切らせてその家の前に辿り着き、目を瞑れば……やっぱり、群青に魅入られた女の子が一人。さっきすれ違った子。

その子の群青を、動かす。放っておけないのが治ったわけじゃないのだ。

親愛と感謝が違うのはさっき教えてもらったから、感謝はいらない。放っておけないから、仕方がない。早めに動かしたから死にきれない、みたいな風になる事も無いはず。

……こういう仕事も、合っているかもしれないなぁ。なんとか相談室、みたいな。

あ、でも経験が無いから……ええと、催眠術師とかの方が……うわ、胡散臭い。

んー、あんまり信じてないけど……占いでも受けてみようかな？

「……うん、大丈夫」

死ぬ気は、ないみたいだ。

家までの一本道。

私はもう足を踏み外さない。どこかのお世話焼きが道を示してくれたから。
ありがとう、先生。ようやく私は、私を測るコトが出来たみたい。
だから、これで私の物語もおしまい。
群青は変わらず傍にあって、相変わらず世界は群青色のままだけど。
私はそれに向き合って、要らないって言えるような幸せを、手に入れたいと思います
――。

自殺測定　／　了

蛇足確認

蛇足確認　／

一九九六年、一月。

冬の斬り付けるような寒さに震えながら、私は一人繁華街を歩いていた。

夕暮れの学校を出た後の、着の身着のままであるから、少しだけ後ろめたい感覚に後ろ髪を引かれながらも、明るい場所から暗い場所へと突き進んでいく。

深夜十時の誘い。真夜中手前の彷徨い。道辻に眠る夢見人。

目蓋の裏にそんな文字を浮かべながら、群青の導くままに歩を進める。

瞳は閉じている。それでも見える群青を頼りに、目的の場所へと急ぐ。

私服オッケーな学校で良かった。これがもし制服着用義務等であれば、確実にしょっ引かれていた事だろう。今でさえ少々危ない絵面であるのは自覚しているのだし。

余程の事が無ければ私は群青の行きたい場所に行ってあげる。それが生存の近道である事を知っているし、何より彼らは無意味なコトをしないから。

今日、友人に事実を告げた。

貴女はもうすぐ死ぬ。群青に魅入られていると。

そうしたら友人は、朗らかに笑って、〝それは俺だよ〟と言ったのだ。
直後に現れたもう一人の友人によって群青が動きを見せた。だから、私はいまここにいる。
貴女ではなく貴方であったことなど、気付くにそう時間はかからなかった。
そんな素振り、全く見せなかったのに。
改めて群青を見てみれば、酷くイビツな――三つの群青が彼女にあったというのに。
私は群青に従う事を優先して、友人を見殺しにしたのだ。
その罪悪感もあってか、この群青の行く末だけは何としてでも見届けなければならないと思っていた。
「……別に、私が悪いわけじゃない……はず」
ひとり呟く言葉に自信は無い。寿命（サキ）を知っていて、その回避に尽力しないコトはもしかしたら悪い事なのかもしれないから。
それを教えてくれる人は、誰もいなかったし。
ただ、昨日まで友人だった存在が死ぬという――得体の知れない感情だけは、どうしても上手く処理できずに、心に蟠りのようなものを作っていた。
私はこれを、なんて呼べばいいのか知らないのだ。
分からない事を怖いと思う心さえも、育っていなかった。

だってこれは、両親が死んだ時から私の中に存在する、酷く当たり前の感情だから――。

〝いらっしゃい。ちょっと寄って行くかい、お嬢ちゃん？〟

歩を止めて、瞳を開く。

ガジガジとノイズのかかる群青。魅入られてこそいないけど、その動きは遅い。そう、長くは無いかもしれない。

あの赤い夕暮れの世界から一転、高い建物に囲まれたここは、繁華街の光さえも届かない紺碧の世界。深い青だからこそ群青は目立つ。その身を仄かに光らせて、ヒトダマのように漂い浮かぶ。

群青の辿り着いた存在は、一人の占い師の女性だった。

確か――なんだっけ、学校の誰かが話していたような。良く当たる占い師、だっけ？

「そ――」

れは、なんとも胡散臭い。そう言おうとした口をぎりぎりで噤む。

いつもの角の立つ冗談は、ある程度気心の知れた……具体的に言うとあの真黒眼鏡だからこそ投げかけられるもので、初対面の相手に言う言葉じゃあない。

「私を占っても、出て来るのは〝死なない〟って事だけだと思うよ？」

慎重に言葉を選んだ結果がこれだ。年長者に対する礼儀のれの字も無いけれど、私も

寿命を視る者として、どこか対抗意識があったのかもしれない。
一応、虫眼鏡を持っているから、手を出してみる。
占い師の女性は私の手を掴むと、まじまじとそれを眺め始めた。あ、虫眼鏡使わないんだ。
「私は死なないんだ。そうであるように生きているから。どんな悲劇を占われても大丈夫。死ななければ問題は無いよ」
私の言葉に呼応するように、私の群青が跳ねて回る。
ただし、喜んでいるわけではない。その動きは、茂みから大口を開けて獲物を狙う肉食獣のソレだ。群青は決して私を狙わないわけではない。
〝確かにアンタはちょっとやそっとのことじゃあ、死なないだろうね。でも、アンタは必ず死にたくなる。自ら死を選ぼうとする〟
その、おかしなほどに的確な言葉を聞いて、瞬時にそれを忘れた。
「ダメだよ、お婆さん。私はソレ、見たくないんだから」
そうかい、と占い師は微笑んだ。
まるで我が子を、否、生まれたばかりの幼子を愛でるかのように、優しい手つきで私の手を撫でるように揉む。その意味を理解する事は、今の私にはできなかった。
「それでも私は死なないよ。ゼッタイ。それよりさ、お婆さん。私、欲しいものがあるん

だけど」

〝それこそダメよ、お嬢ちゃん。私じゃそれをあげられないもの……それは、くれる人からもらいなさい。いい？　欲しがるものを、違えてはダメよ？〟

占い師は迷子の子供に帰り道を教えるように、優しい声で言う。

ズキ、と胸の奥が痛んだ。

まただ。水野良空は、これを知らない。

〝そう――まだ、知らないだけ。大丈夫。それをくれる人と、それを教えてくれる人は違うけれど――どちらも、貴女のすぐそばで、あなたを見守っているから〟

けど、そうなのか。

答えがすぐ近くにあると知って、安心した。

先行きの不安は元から無い。安心したのは、この心のざわめきに対してのこと。

「……じゃあ、お返し。貴女はまだ、これから……十五年以上は生きるでしょう。貴女の群青、初めは大人しいと思ったけど……ううん、根がとびきり強いだけで、凄く元気だからね」

群青に誘われた路地裏の、灯りの無い世界にお別れの言葉を告げる。

次第に増えて行く生活の光。そして減っていくともしび。

街路樹が増えてきて、木々のせせらぎが耳朶を打つ。
その心地良さに思い出したのは、とある先生とクラスメイトだった。
〝――すぐそばで、あなたを見守っているから――〟
うん、じゃあ、焦らなくていいね。
選択を避けるように、曖昧に隠した本音を夜空に溶かして。
今はまだ、良空は何も知らない。幼いままに、生存効率だけを見て生きる群青色。
罪の意識は消えないし、心に在るソレが何かはわからないけど。
誰かが私を見守っていてくれるのなら、いつか必ず教えてもらえると信じて。
「けど、お嬢ちゃんって……私、もう高校生なんだけどなぁ」
寒空に不満を一つ。
もちろんそれが身体の成長ではなく、心の成長である事は知っているけれど。
ひどく曖昧な、夢を見ているような思い出を胸に、私は帰路へと就くのだった。
蛇足確認　／　了